

平成 22 年 10 月 13 日

## 10 月の木材価格・需給動向

### 1. 国産材(北関東)

栃木は、全般に順調な荷動きが続いている。スギ柱材は、一服感から再び引合い強く、中目材も大手工場の手当姿勢が更に強まる。ヒノキは、柱材・中目材ともに品薄感強く好調を維持。丸太の生産は、雨が多く作業は遅れ気味。入荷は平年並みに回復したが、工場の丸太在庫は全般に少なく、大手中心に積極的な手当が続いている。スギは柱材が再び強保合に転じ、中目材は積極的な手当と重なり強含みの展開。ヒノキは柱材・中目材ともに出材少なく品薄感から強含みで推移。群馬は工場入荷がスギ、ヒノキともに少なめ。工場はほぼフル操業。受注・販売状況は 9 月から良くなった。原木価格は急上昇だが、製品価格への転嫁がなかなか進まない。県住宅補助事業が先月で終了し、今後の落込みを懸念したが、補正予算で追加枠が出来るとのことで一安心。

### 2. 米材

8 月の米国新設住宅着工数は、前月比 10.5%増の年率 59.8 万戸となった。米国丸太は全体的に横這いだが、中国向け出荷が増加に転じたことで、ローグレードの価格が強含む。また、カナダ丸太は港頭在庫の減少（山火事、価格低迷による伐採量減少）により、セカンドグロス保合、オールドは強保合。9 月の産地港頭在庫は約 5,500 万スクリブナー(約 25 万 m<sup>3</sup>)。また、ウェアハウザー社の 10 月積み米マツ IS ソートはまだ決まっていない。米材丸太の入・出荷・在庫ともに横這い。大型港湾製材工場の 9 月の荷動きは前年同月を上回り順調。内陸部製材工場の荷動きは、工場差はあるものの総じて低調。一方、製材品は円高でも入荷が増える動きはない。米国の住宅着工が低迷している中で、米加とも日本向け製材工場は限られており、生産量は横這い。産地価格は、カナダ日本向け米ツガは据え置き。米国日本向け米マツは強い。SPF 製品は中国向けが下支えで上げ基調。米ツガ角、特に母屋角の動きが悪く在庫増。割物は品薄が続く。

### 3. 南洋材

サバ州は、断食明けで出材が回復すると期待したが天候悪化で停滞。また、

伐採規制の強化から良材の出荷が一段と落ち、相場は現地通貨高もあって強含み。原木手当が出来なく採算悪化のため工場閉鎖も見られ、製品は総じて強含み。サラワク州は断続的に降雨があり不順となっている。伐採地区の奥地化、小径材化でコストアップの状態。インド向けが定期的に配船され、相変わらず港頭在庫は極めて少ない。特にタンジョンマニ地区の出材がかなり落ちこみ、この地区の良材原木が一段と強含み。PNG・ソロモンの出材状況の悪化は改善されず、相場は引き続き強含み。丸太・製材品の入・出荷は横這い、丸太在庫はやや減少。原木の販売状況は、合板用・製材用ともに低迷。製材品は各種平割の入荷は少なく、在庫はかなり減少したため荷動きは良好。しかし、採算となると、川下からの値引き要請が強く、良好とは言えない状況。

#### 4. 北洋材

ワニノ港の丸太在庫は9,800 m<sup>3</sup>と前年比30%。6月にスタートしたアムール配船も終盤を迎え、新規のオファーは無し。日本からの引き合いもまばらで価格は横這い。過去最低のアムール材の配船数量となる見込み。時期的にワニノの一般材も端境期に入るため出材は少なくなると予想されるが、中国はすでにNZ、北米に大幅シフトしており、大きな混乱はない。シベリア地方は採算悪化のため伐採業者が撤退し、大幅な出材減。特に現地製材工場は原料不足で原板、完成品とも供給は少ない。富山港・富山新港の9月丸太入荷は、13,651 m<sup>3</sup>(アカマツ6,061 m<sup>3</sup>、エゾマツ6,886 m<sup>3</sup>、カラマツ704 m<sup>3</sup>)と先月比5%増。製品は6,886 m<sup>3</sup>で先月比13%増。荷動きは丸太、製材品(輸入製品、国内挽き)とも低調だが、輸入アカマツ製品Cグレードは売行き良好。在庫は1.5~2ヶ月。価格は丸太、製材品とも横這い。国内製材工場は生産調整が続き、エゾマツ丸太挽きはトントン、アカマツ丸太・原板は相変わらず不採算。

#### 5. 合板

合板用丸太は、国産材は山側とメーカー側とで価格の折り合いがつかず保合。南洋材は以前ほど不足感はなく、高値張り付きの状態。北洋材は横這いで引続き引合い弱い。8月の国内の合板生産量は約21.9万m<sup>3</sup>で、うち針葉樹合板は19万m<sup>3</sup>(対前年同月比118%)で、出荷量は18万m<sup>3</sup>(同95%)となった。生産量は6月の約20.8万m<sup>3</sup>をピークに以降は減少傾向だが、出荷が3ヶ月連続で生産を下回ったため在庫は増加。国内産の合板は、一般ルートでは荷動き低調で足踏み状態。特に、依然としてメーカー側は値戻し姿勢を崩しておらず、にらみ合いは暫く続く見通し。国産針葉樹合板は、メーカー側の唱えが浸透せず保合が続いている。市場では荷動き不振から下落への懸念が漂っているが、ここ数ヶ月は川上を中心に何とか持ち堪えている状況。一方、輸入合板は、入荷増と決算月

とが重なり、一部の品目は弱含んだが、産地情勢に大きな変化がなく、10月以降の相場が注目される。8月の新設住宅着工戸数が19ヶ月ぶりに7万戸台に回復し、明るい兆しが見られるなか、国産、輸入合板ともにタイトな品目は見当たらず、足元で大きな変化なく保合が続く見通し。

## 6. 構造用集成材

欧州現地の夏休みの影響で10月入港は非常に少ない。しかし、7～8月の現地港湾スト明けの出港分が集中し、これまでの在庫で10月入港減はまかなえる。10月1日からフィンランドの8製材工場が起こった賃上げストはほぼ収束し、昨年5月のように極端に少なくなることは回避される見込み。国産RW、WW梁は10月を向かえピークに達しているが、価格は据え置きの状態。国産カラマツ、スギEWは供給先が増えず品薄。国産集成材のうち梁は落ち着きつつある。柱はメーカーによって在庫増。価格動向は、管柱の需給バランスに一服感。管柱は原料高の製品安の可能性あり。梁は依然値下げ感なし。輸入集成材は、現地は販売価格に影響するようであれば減産する方針で、輸入梁は上げ相場。管柱は需給バランスによって多少の下げはありうる。10月は大手ハウスメーカーが上棟のピークを迎え荷動きは良い。全国のプレカット工場もフル稼働の状態。柱に関してはスギKD材が売れている。

## 7. 市売問屋

国産構造材は、低調な中でも秋需期を向かえスギ、ヒノキ柱、マツ梁に小動き。外材も国産材同様にWW、RWの管柱、梁桁は小動きあり。造作材は、国産材は低調、外材では米材で現地火災の影響から、スプルース、ヒバの良材は品不足。本格的秋需を期待するも円高の不安が一杯で買い控え傾向。公共建築物等の木材利用促進法の施行に伴い、木材需要拡大を大いに期待したい。

## 8. 小売

国産材の構造材価格は、スギKD柱は強含み、ヒノキKD柱・土台は変わらず。外材は、米ツガKD平割、正角とも横這い。欧州材間柱等は弱く1,000円/m<sup>3</sup>下げ。ロシアアカマツ垂木は横這い。WW、RW集成材は梁、柱とも弱含み。合板は針葉樹、ラワンとも横這い。床板は変わらず。プレカット工場の受注・加工とも順調に推移しているが、工場別の格差拡大。工務店の仕事は、全般的に仕事が出ている感じだが、企業の偏りが顕著。

[【参考資料】需給価格動向 PDF ファイル](#)

事業名：林野庁補助事業「木材利用促進のための市場情報集積提供事業」

事業実施主体：特定非営利活動法人 活木活木（いきいき）森ネットワーク